



[評者]

龍華 章裕

リウゲ内科小田井クリニック

# Dr. 長澤印 輸液・水電解質ドリル

長澤 将 著

●B5 頁192 2023年10月

定価：4,620円(本体4,200円+税10%)

[ISBN978-4-260-05296-2] 医学書院刊



私は最近まで3次救急病院で働いていたが、3次救急病院はその病院の特殊性からか電解質異常の症例に満ち溢れている。病棟で研修医や若手の内科専攻医と診療をしていると、彼らがいかに電解質異常の診療に苦手意識をもっているかがよくわかる。これは、おそらく、「細菌性肺炎→抗菌薬投与」といったような、ルーチンでの対応が電解質異常では現実的ではないからだと思う(そこに面白さがあるようにも思うが)。例えば低Na血症。その原因は多岐にわたり、その治療方法も病態によって使い分けが必要であり、目の前に低Na血症の患者さんがいても、若手の医師は次にどのようなアクションを起こせばよいのかわからないのだ。

このたび、長澤将先生の『Dr. 長澤印 輸液・水電解質ドリル』が上梓された。学会関連のWEB会議で一緒にさせていただいたことがあり、一方的に存じ上げていたが、ここ数年は若手の先生が腎臓内科をローテーションしてくると、長澤先生の本を携帯していることが多く、長澤先生の「とっつきにくい腎疾患を若手に教えること」における影響力の大きさを感じざるを得ない状況である。さらに、先日日本腎臓学会総会(2023年)では、前方の席でたくさんメモされている姿を目にし、長澤先生の影響力はこの勤勉さから来るのか、と思ったのを昨日の日のように思い出す。そんな長澤先

生の書かれた本書は、「まさに超現場至上主義」である。

1章は、各電解質異常の病態が解説されているが、いたずらに細かい病態生理は省いてあり、かつ現場で見ないような病態(例えば、体液量の多い高Na血症など)に関しても、「ここはない」「これも見たことない」と現場目線で潔くカットされている。

2,3章は実際の症例提示がなされ、現場でよく遭遇する症例を中心に解説されており、網羅性以上に、「〇〇という病態を見たら、まず□□を考える」といったような、超実践的な現場で役立つ知識のオンパレードである。さらに、フロセミドは食事の影響を受けるから、患者さんには「朝起きて、体重を測って、飲むか決めましょう」と話すと良いなど、電解質異常以外の超実践的なクリニカルパールも散りばめられている。何が重要な順位付けをすることが難しい初学者には、網羅的であるマニュアル本よりも本書のような潔い実践的な本のほうが現場での瞬発力を鍛え、活躍してくれるのではないかと思う。

この現場のニーズを満たした本書は、きっと電解質異常という深い迷路で行き先を見失っている若手の医師だけでなく、そういった症例の診療をサポートする医療スタッフの助けにもなってくれることは間違いないであろう。